

TAMA CINEMA 通信



TAMA CINEMA FORUM

TAMA映画フォーラム実行委員会 〒206-0025 多摩市永山1-5 ベルブ永山(永山公民館内)
代表:042-337-6661 直通:080-5450-7204 <http://www.tamaeiga.org/>

特別上映会

ベルブホール (ベルブ永山 5F 京王永山駅・小田急永山駅下車徒歩約2分)

6/6 日

OYAKO

-present to the future-



7月の第4日曜日は
親子の日

www.oyako.org



[上映時間]

① 10:30 - 12:00

② 13:00 - 14:30

トーク (14:30 - 15:10)

ブルース・オズボーン氏

井上佳子プロデューサー

③ 16:00 - 17:30

④ 18:00 - 19:30

- *全席自由・各回入替制。開場は15分前です。
- *上映時間は変更になる場合があります。
- *トークはチケット(半券含む)提示で入場できます。

企画者からのメッセージ

映画『OYAKO - present to the future -』を上映するにあたり、インターネットでいろいろと調べたのだが、キーワード「OYAKO」で画像検索すると相当な数のおいしそうなお親子丼が表示されて興味深かった。食もまた文化であり、親子丼の存在は日本において「親子」という概念が定着している証といえるのではないだろうか。

それはさておき、本作のなかで語られる親子像は、当然ながら幅広い。仲野茂氏、大林宣彦氏、コシノジュンコ氏、三浦豪太氏、鳥越俊太郎氏らのインタビューからは、それぞれの親子の関係が良く伝わってくる。また、挿入される親子についてのドラマも余韻を与えてくれる。自分にとって親子の存在はどういうものだろうか、みなさんに感じていただきたい。

ブルース・オズボーン氏の写真集を手にとってページをめくると、「OYAKO」はもっと幅広く奥深いものを感じた。社会にはたくさんの職業・役割があって、親から子へ受け継いでいるものもあるし、新たにチャレンジしてそうしたものを手にする例もある。ただ、社会的立場などの外形的なことよりも、親子の内面的なつながりや無意識に受け継がれる存在感・所作などが、私には全体として印象的に感じられた。また、1982年から30年以上にわたり5,000組もの親子を撮影してきたブルース・オズボーン氏の仕事は、まるで親子を基準にした社会の定点観測のようだと思った。その仕事を通して、時の流れ、時代の移り変わり、流行を切り取ってきたといっても過言ではないだろう。

「OYAKO」を日本独特の概念として提示する写真家の活動に加え、毎年7月第4日曜の「親子の日」に関する取り組みなど、ブルース・オズボーン氏の米国出身ならではの視点に触れて、日本で生活する私たちはあらためて考えさせられることが多い。それは、身近な人間関係の質が問われる現代社会においてより重みを増している重要な指摘であると思った。(山口)



あの人のあたまのなか

『みちていく』竹内里紗監督インタビュー

聞き手（実行委員：奥住・矢部・佐藤）



昨年の第15回 TAMA NEW WAVE でグランプリを受賞した『みちていく』。陸上部の女子高生の思春期特有の心の揺れが瑞々しく描き出された本作品は、会場の観客から熱い支持を受けました。弱冠23歳の竹内里紗監督に、本作を振り返って語って頂きました。

『桐島』で描かれていなかった人たちを題材にやりたいという気持ちがありました。

— 本作のアイデアはどのように生まれたのですか？

竹内 高校生の話を書こうと思ったときに、主役の二人（飛田桃子、山田由梨）に「高校生のときに一番印象的だった出来事は何？」と聞いて考えました。飛田は水泳部だったのですが、途中で選手からマネージャーに変わったらしいんですよ。私も高二のときに部活を途中で辞めてるんですけど…そういうときのことで印象に残るよねって、結構二人で共感し合ってます。それで題材として辞めるときの気持ちを扱うのではなくて、辞めるということ自体をどちらかの主人公に設定して描こうと考えました。

— 本作を作るにあたっては、キャストが先に決まっていたんですか？

竹内 飛田と山田と制作するというのが先に決まっていた。なので二人が一番魅力的になるようなキャラ設定にしようと思って、最初は家族ものにしようとしたんですけど、どうも姉妹には見えないと思って書き直しました。二人とも友達で色々知ってるので、やっぱり彼女たちをちゃんと見て書いた方がいいと思います。先ほど話したような二人の体験談を聞くことになりました。また、飛田は体つきとか不思議な存在感がありますし、山田は正統派の美少女で演技が上手なのでそこを活かしたいと思いました。

— お二人とも大学の同級生なんですか？

竹内 そうですね。

— 本作の題材は主役の二人との話の中ですべて決まったのですか？

竹内 二人と話して決めたところもありますし、元々描きたいテーマもありました。劇中に星野さんというクラスで手首を切って途中で消えてしまう女の子がいるのですが、そのクラスメイトが消えたことに対して、主役の子が他人事なだけけど心が揺れてしまうような感じを描きたいという気持ちがありました。そのクラスメイトも消えて終わりじゃなくてまた戻って来るといった部分も残して。そこにいた、消えちゃった子じゃなかった方の残された側の子たちの話をやりたかったんですよ。部活でどうのこうのというのは、それよりももうちょっと後で加わりました。

— 『桐島、部活やめるってよ。』（2012/監督：吉田大八、以下『桐島』）みたいな感じですか？

竹内 『桐島』を観た人のツイッターの感想で、「『桐島』に自分がいなかった」というのがあって、あの作品ではスクールカーストが描かれていますけど、でもその枠にも入らないような、例えば机で突っ伏して寝ているような人なんかはなかったみたいなことを書いてあるのを見ました。私も吹奏楽部だったのでわかる場所もあったんですけど、あそこには確かに自分みたいな人はいなかったなと思いました。『桐島』はこれまであまり描かれてこなかった青春の部分が描かれた作品ではあるんですけど、そのツイートをみたことがきっかけで、私は『桐島』で描かれていなかった人たちを題材にやりたいという気持ちがありました。

— 確かに私も『桐島』に自分はいなかった派ですね（笑）。

竹内 あと私の場合は周りに中退するような子も多く居て、その子たちのことも描けたらと思いました。そこを描いたら、きっと『桐島』に自分がいなかった人の中にも何となくわかる人がでてくるのかなって思いました。

— 設定を陸上部にしたのは、どんな狙いからですか？

竹内 陸上部にしたのは、まず飛田の脚が魅力的だったというのが大きな理由です（笑）。彼女は走れませんし、山田も走れませんが。本当はもっと身体の動きを撮りたかったのですが、やってみたらうまくいかず、かなり部活のシーンを減らしました（苦笑）。

— 私も見ていて、陸上部という設定の割には、走ったり汗をかく描写が少ないのがちょっと気になりました（笑）。

竹内 そうですよ。だから出来上がったときは焦りました。陸上のシーンがなさ過ぎでしょう！って（苦笑）。

— でも全然違うところで魅せていく映画ですよ。

竹内 でも本当はスポーツを撮りたいという気持ちはすごくありました。映画でテニスを撮ったこともあって、そのときも上手くいかなかったんですけど…身体が動くというのは映画的な題材だと思うのでこれからもチャレンジはしたいです。

今の時点で自分が映画を続けていくことを受け入れてもらえるのかわかりました。

— TAMA NEW WAVE（以下「TNW」）には応募された経緯を教えてください。

竹内 私が手伝った『くじらのまち』（2012/監督：鶴岡慧子）と

一緒に PFF に入選していた『かしこい狗は、吠えずに笑う』（2012/監督：渡部亮平）が、後に TNW でグランプリを受賞したと聞き、TNW の存在を知りました。プロの審査員ではない一般のお客さんが審査するというのは、映画の内容に重点が置かれた審査だと思うので、グランプリを観客投票で選ぶ（※）というのはすごくいいなと思いました。

以前から映画祭への応募は考えていたのですが、影響されやすい性格なので賞やコンクールといったものが苦手で、応募自体は今回が初めてです。『みちていく』は卒業制作だったので、みんなに観てもらえるチャンスがあるなら出してみたい方いいなと思って応募しました。これでダメだったら映画を続けずに普通の会社に就職することを考えていました。学内の人たちは自分たちの映画について演出面やテクニックの話はしていましたが、一般的な感想や評価はわからなかったもので、今の時点で自分が映画を続けていくことを受け入れてもらえるのか知りたかったんです。

だから TNW にノミネートされて、グランプリを頂けて、とても嬉しかったです。これがきっかけで、演出やカット割りといった技

巧的なところを磨いていくことだけに偏らずに、内容的な面に力を入れて、映画を制作している人にも制作していない人にも誰にでも面白いと言ってもらえるような作品を作っていきたいと考えようになりました。それまでは誰にも観られなくても映画を続けて、自分の思う良い映画を撮って、映画と一緒に死ぬのかな…みたいな気持ちが強かったのですが、すごく健全な気持ちになりました（笑）。

—それはよかったです（笑）。

※ 映画祭実行委員会で選出したノミネート作品をコンペティション当日に一挙上映し、実行委員票と一般観客（＝事前応募の“一般審査員”）投票の合計点でグランプリを決定している。

【作品情報】

監督・脚本 = 竹内里紗
 撮影 = 松島翔平
 音楽 = 金光佑実
 出演 = 飛田桃子、山田由梨、鶴田理紗、西平せれな、崎田莉永、山口佐紀子、篠原友紀、宮内勇輝、泉水美和子、小野孝弘

（あらすじ）
 歳の離れた恋人に身体を噛んでもらうことでしか満たされない陸上部のエースみちる（飛田桃子）。生真面目で部員達に疎まれる部長の新田（山田由梨）。二人は互いの空虚を埋め合うように、だんだんと近づいていく——。

竹内里紗監督プロフィール

1991 年生まれ、神奈川県出身。立教大学映像身体学科にて万田邦敏教授のもと劇映画の演出について学びながら、自主映画製作サークル「シネマトグラフ」にて自主映画の製作に携わる。同大学卒業制作である『みちていく』が第 15 回 TAMA NEW WAVE グランプリ、第 12 回うえだ城下町映画祭で大賞を受賞し、今年劇場公開される。

『みちていく』（2014/HD/89 分）
 6/27（土）より渋谷ユーロスペースにてレイトショー公開



TAMA NEW WAVE

<http://www.tamaeiga.org/newwave/>

@tcf_nw

第 16 回 TAMA NEW WAVE コンペティション作品募集中！

TAMA NEW WAVE は「日本映画界に新風を送り込む新しい才能の発見」をコンセプトに掲げた中・長編コンペティションです。

観客目線で今最も面白く、注目すべき作品・才能を表彰するコンペティションとして注目を集めています。これまでのグランプリ受賞監督には中野量太監督（『チチを撮りに』）、深川栄洋監督（『60 歳のラブレター』『トワイライト ささらさや』）、今泉力哉監督（『サッドティー』『鬼灯さん家のアネキ』）等々、日本映画の第一線で活躍する監督を多数紹介してきました。

現在、今年 11 月に開催される第 16 回 TAMA NEW WAVE コンペティションに向けて、作品を募集しております。応募締切は 6 月 26 日（金）。応募要項は、映画祭 HP よりご確認ください。皆様からのたくさんのご応募をお待ちしております。



第 15 回 TAMA NEW WAVE コンペティション受賞式より

『ひとまずすすめ』（柴田啓佑監督）

6/6 (土) ～ テアトル新宿にて1週間限定レイトショー公開！

昨年のTAMA NEW WAVEコンペティションのノミネート作品。地方都市に住むアラサー独身女性が、いまの生活から抜け出したいと思い悩む姿をやさしくユーモラスに描いた快作です。

『みちていく』（竹内里紗監督）

6/27 (土) ～ 渋谷ユーロスペースにてレイトショー公開！

昨年のTAMA NEW WAVEコンペティションのグランプリ作品。女子高陸上部のエースとキャプテンの関係を中心に、思春期を過ごす女子高生たちの姿を瑞々しく切り取った作品。大学の卒業制作とは思えない見事な会話のアクション演出は必見です。

<http://www.tamaeiga.org/newwave/> [@tcf_nw](https://twitter.com/tcf_nw)

7/11 (土)
ベルブホール



次回特別上映会は、7/11 (土) に『バベルの学校』を上映いたします。アイルランド、セネガル、ブラジル、モロッコ、中国など様々な国からパリにやってきた11歳から15歳の子どもたちが一つのクラスで過ごす一年間。国籍も宗教もフランスにきた理由も違う子どもたちの中には時に大声で口論し、泣き、自暴自棄になる子も。ブリジット・セルヴォニ先生は、そんな子どもたちを驚くほどの辛抱強さで見守り、なだめ、そして導いていく。本作品を通じて、国境を越えた共生を考えてみてはいかがでしょうか。たくさんのご来場をお待ちしております。

支援会員制度のお願い

当映画祭を一緒に支えて頂ける支援会員を募集しています。映画を「見る人、見せる人、創る人」の交流の場づくりを通じた、地域と日本映画界の活性化に向けて、資金面でサポート頂けませんか。ご支援頂いた方には特典をご用意していますので、ぜひご協力をお願い致します。

[支援金寄付 個人会員]

一口1000円

郵便振替番号 00160-5-541123

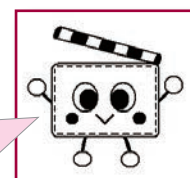
加入者名 TAMA映画フォーラム実行委員会
(ご不明な点はお問い合わせください)

特典①: 映画祭チラシ送付 特典②: 映画祭パンフレット贈呈

特典③: 特別上映会割引 (当日料金が半額! 2~8月の間に4~5回開催予定)

※その他特典もご用意する予定です。

よろしく
お願いします!



TAMA映画フォーラム実行委員会ホームページ www.tamaeiga.org

[@tamaeiga](https://twitter.com/tamaeiga) (最新情報をフォロー) www.facebook.com/tamaeiga (facebookページに「いいね!」で参加)